

滋賀の文化情報誌
デュエット

2017 冬 vol.122

特集

近江日野商人ふるさと館 旧山中正吉邸

新撰 淡海木間撰 66

日野祭礼之図 渡辺雪峰

INFORMATION STATION 催し案内 2017 冬

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

特集

近江日野商人ふるさと館 旧山中正吉邸



板堀に囲まれた敷地面積は約2,000㎡。
明治からの増改築を経た昭和13年
(1938)頃の姿をとどめている
(日野町教育委員会事務局提供)

うま み おかわむき
馬見岡綿向神社の参道に面する旧山中正吉邸は、天保期から酒造業により財を築いた日野商人・山中正吉家の本宅で、平成25年に日野町の所有となり、平成27年4月、歴史・文化資料を保存・公開する近江日野商人ふるさと館旧山中正吉邸として開館しました。

明治・大正・昭和初期にかけての増築・改築により農家住宅と書院造りと洋館が連なる同館で、日野町教育委員会事務局の岡井健司さんと振角卓哉さんにお話をお聞きしました。

■近江日野商人ふるさと館 旧山中正吉邸

住 所 蒲生郡日野町西大路1264

連 絡 先 TEL 0748 (52) 0008 FAX 0748 (52) 3850

休 館 日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日、年末年始

入 館 料 大人300円、小・中学生120円

アクセス 近江鉄道日野駅下車、近江鉄道バス北畑口行き、向町バス停下車、徒歩2分／名神八日市ICから約25分、竜王ICから約30分

取材／編集部 写真／辻村耕司

北西方向から馬見岡綿向神社、日野川ダムを望む。赤丸の中が旧山中正吉邸
(日野町教育委員会事務局提供)



近江日野商人ふるさと館
旧山中正吉邸

地域との関わりが濃い日野商人の屋敷を、歴史と文化を伝える交流の場に

戦国期には蒲生氏の城下、江戸時代には市橋家仁正寺藩へ

—ここは昔でいう西大路村（仁正寺村）^{※1}で、江戸初期に幕府領だった日野三町（村井・大窪・松尾）の東隣ですね。東西の通りでいうと、東のはずれにあたりますが、

岡井 当館がある西大路の歴史を見るなら、もう一つ前の蒲生氏の中野城（日野城）があった時代の武家地と城下町までさかのぼっていただいた方がいいと思います。

振角 中野城の回りに家臣団の居住地、いわゆる武家屋敷が配されていました。その外側に商工業者の居住地が配されたのです

が、それ以前から商人・職人町があったと考えられます。つまり、室町時代までさかのぼると、商人・職人町の方がまずあってそれを支配下に置こうとした蒲生氏が近くに城を築いたという、普通の城下町とは逆の流れです。

岡井 まず、市が立っていたんです。最も古くは、応永33年（1426）の文書に「日野市」という言葉が出てきます。はっきりした位置は不明なのですが、綿向神社の門前の宮市がベースなのだろうと思います。

振角卓哉さん

ふりかど・たくや／1969年、広島県生まれ。日野町立図書館等を経て、近江日野商人ふるさと館勤務。専門は考古学。

「お城と武将が大好きで、三重県亀山市にある道場に通り、心形刀流剣術も習っています」

岡井健司さん

おかい・けんじ／1970年、滋賀県生まれ。日野町史編さん室事務局を経て、近江日野商人ふるさと館勤務。専門は日本近世史。

「私は八日市で生まれましたが、日野出身の妻と結婚するまで日野には来たことがなくて（笑）」

振角 東近江の八風越えや千種越えは、中世には東海道よりたくさんの方が行き来したと言われています。東海道は険しくて山賊も出るというので。

—日野は、八風・千種街道と東海道のちょうど中間に位置するわけですね。

振角 当時はとても利便性のよい重要な地だったんです。信長の息子の織田信雄が伊勢に領地をもらった時期には、安土と伊勢を結ぶルート上でもあったり。

—江戸時代になると、藩の陣屋が置かれますね。

岡井 市橋家の仁正寺藩の領地となります。江戸時代の領主の分布をみると、日

※1 仁正寺村 幕末の文久2年（1862）に仁正寺藩が西大路藩と改称したことに伴い、仁正寺村も西大路村と改められた。

※2 蒲生氏 室町時代から近江の守護大名・六角氏に仕えたが、蒲生賢秀の代に六角氏が織田信長に滅ぼされると織田氏に属した。賢秀の子である氏郷は、信長・秀吉に仕え、その戦功により伊勢へ、さらに会津若松へ転封となった。

野町域は非常に入り組んでいます。仁正寺藩の領地はわずか5カ村で、それも飛び飛びにあって、彦根藩や膳所藩のような領国があったわけではありません。

振角 市橋氏はもともと美濃国守護の斉藤氏に仕えていましたが、織田信長の美濃攻め後、市橋長利は信長の家臣となります。信長の妹のお市の方が浅井長政に嫁ぐ時に仲介をした人物として有名な長利は、豊臣秀吉にも重用されました。

長利の息子の長勝は、市橋家「中興の祖」と呼ばれる人物で、信長・秀吉に仕えた後、徳川家康のもとで関ヶ原の戦いや大坂の陣で戦功をあげ、越後国三条（新潟県三条市）の大名となります。ところが、長勝には跡継ぎがいなかったため、死去により領地が没収されようとしたのですが、家臣たちの嘆願によって、養子であった甥の市橋長政が相続することを認められました。これは異例中の異例で、徳川家が長勝の功績を高く評価していたことを物語っています。

そして、元和6年（1620）、市橋長政が2万石の大名として仁正寺村に入ったのが仁正寺藩の始まりです。長政は大坂城の再建工事や多賀大社造営などにも携わっています。

幕府にも重用された大名なのです。

振角 戦国ファンに市橋氏はよく知られていますが、規模的には小藩ですから、一般にはあまり知られていないと思います。

岡井 歴代藩主の中では、7代藩主の市橋長昭が幅広い分野に通じた文化人として有名です。藩校を整備したり、地史の編纂を命じたり、自身で収集していた中国の宋と元の時代の本の中から特に価値があるもの

富士山の麓で酒造業を営み成功した初代山中正吉

市橋家と、こちらの山中家の関わりは

どこから。

岡井 幕末の頃、初代山中正吉が市橋氏からこの土地を拝領したと、当家には伝わっています。山中正吉家は、現在、近江日野商人館になつている山中兵右衛門家の分家筋にあたり、二代兵右衛門の次男の与兵衛の八男が初代正吉（1809）で、行商から身を起こしたたたき上げの人物です。

この土地はどんな場所だったのですか。

岡井 江戸時代中期まで、参道の両側に、蒲生氏郷が名づけた「会津若松」の由来である「若松の森」の名残の松並木があったのですが、枯れてしまっています。周囲には武家屋敷以外、人家はあまりなかった場所のようです。当家に伝わる吊り灯籠には安政年間（1854〜1860）の年記が入っているの、幕末期に、最初の本宅が整備されたものと考えています。

初代正吉は、日野商人として成功するわけですね。

岡井 最初は合衆を、東海道筋で行商したようです。日野商人の行商には2つのルートがあつて、東海道筋ならまず三重に出てそこから東海・江戸をめざす、中山道筋なら北関東に向かい、蓄財するとその行商先で酒造や醸造業を起こしました。

初代正吉も東海地方の静岡県富士宮市（駿河国）で、天保2年（1831）から酒造業を営みます（現在、経営は山中家から移りましたが、富士高砂酒造の名のまま

を文化5年（1808）に湯島聖堂に献納するのですが、それらは現在、国立公文書館の所蔵で、一部は重要文化財に指定されています。

老舗の蔵元として存続しています）。

出店先は富士信仰の篤い地域で、富士山頂の薬師堂（現在の浅間大社奥宮に位置）にあった薬師如来像が明治の廃仏毀釈で廃棄されそうになった時、初代正吉が自分の店の酒蔵にかくまったのだそうです。いまでもその蔵に薬師像が安置され、「薬師蔵」と呼ばれています。そんなことから浅間大社とつながりが深くなり、近江の人を富士登山に案内したり、馬見岡綿向神社にも富士浅間神社を勧請して、祭礼日には本宅で枇杷葉湯を町の人たちに振る舞われたりしたそうです。

山頂に奥宮があるというのは、綿向神社の奥宮、大高神社が綿向山山頂にあるのと同じですね。日野と同じだという親近感が信仰心につながったのでしょうか。

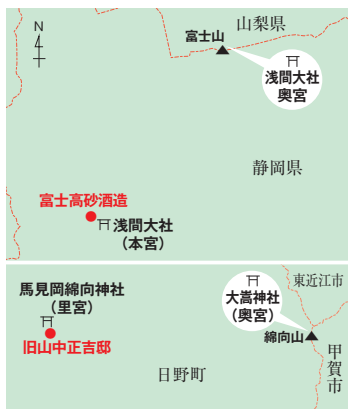
振角 当時の富士山で案内している写真なども残っています。修験者が持つような錫杖もあつて、最初は何に使われたのかわか

代表的な当主をご紹介いただけますか。

岡井 初代は長生きでした。文化6年（1809）生まれで、明治29年（1896）に87歳で亡くなっています。日野商人の文化レベルを示す例ですが、博多出身の絵師、村田東圃に師事した画人でもあり、「松韻」と号していました。日野祭に出る西大路の曳山の見送幕「白茶地群仙図綴錦」は、初代正吉の下絵をもとにしたとされています。

四代目の妻、園子は多くの逸話をのこす女傑

す。関東・東海の文人や絵師とも交流があり、あちらにかかっている掛け軸（「日野祭礼之図」9ページ参照）は、山梨県の画家、渡辺雪峰によるものです。仁正寺藩主市橋氏の好学の気風もあつて、日野全体が文芸に親しむ流れにあつたように思います。**振角** 初代正吉は、当時の日野商人の経済面だけではなく、文化面のリーダーでもあつた気がします。



富士山・綿向山と神社の位置関係

※3 湯島聖堂 東京都湯島にある孔子その他の聖賢をまつた廟。5代將軍徳川綱吉が建立、のちに幕府直轄の学問所となった。

※4 浅間大社 静岡県富士宮市にある、富士山を信仰の対象とする神社で、麓に本宮、富士山頂に奥宮がある。駿河国一の宮。

※5 枇杷葉湯 乾燥したビワの葉を生薬としても煎じたもの。暑気あたりに薬効があるとされ、浅間神社の門前で売られた。

※6 綿向山 鈴鹿山脈の甲賀市と日野町の境界にある山。標高1100m。古くから御神体の山としてあがめられてきた。



↑日本画家・寺嶋白耀が、昭和32年（1957）元旦に園子に贈った謹賀新年の画。中央のだるまは園子がモデルとされる

岡井 内国絵画共進会に出品した作品を宮内庁が買い上げると、そのお金で村内の田用水の水路18カ所に石橋を架けたとも伝わっており、ちゃんと社会貢献もしています。

三代目は、大正から昭和にかけて県議員を3期（大正8〜昭和6年）、その間に県会議長も務めています。

——「だるま部屋」と名づけられた部屋で説明いただいた園子さんは、何代目の奥さんにあたるのですか。

岡井 四代目の奥さんです。もともと近江商人の妻は本宅で主人の留守をまもったわけですが、四代目は早く亡くなったので、五代目の若いうちは後見人として表に出なければいけなかったそうです。会社の代表として、あるいは地域の代表として寄り合いなどにも行かなくてはいいけない立場にあり、多くの逸話がある女性です。

——あちらの額に書かれている強盗に入られても機転をきかして捕まえたという話は……。
岡井 事実どおりか、ちょっと怪しいですが（笑）。地域の記憶として、あのような一種の武勇伝が残るほど、おもしろい方だったようです。

振角 息子である五代目の手記にあるのですが、普段はだるまが好きだから、だるまの帯留めをしていて、男の人との会議の時には、「なめられたらいかん」ということで、般若の面の帯留めをしたとか（笑）。酒造業のかたわら設立された滋賀トヨベットの社員だった方にも強烈な印象を残されています。その火鉢の所にどかと座っていらして……。

岡井 園子さんのご実家は、豊郷町の岡村本家（金亀・醸造元）なんです。岡村家は、永平寺71世貫主の玉堂瓏仙（一八七六〜一九六八）と縁があつて、新座敷に飾っている「高砂」の額は瓏仙の筆によるものです。それから彦根市出身の日本画家、寺嶋白耀にだるまの画を描いてもらったり、社長の代わりや社員教育もしながら、そうした文化的なサロンの一員でもあったようです。

内閣府補助金で、都市農村交流の拠点として再生

——滋賀トヨベットのほうが成長するなかで、こちらの本宅を手放されたわけですか。

振角 五代正吉が亡くなったことで、この家はいったん人手に渡り、その後、日野町が土地を購入し、建物はご寄付いただいた形です。そして、平成27年3月31日付けで町指定文化財になりました。この指定は、建物の保全のためはもちろんですが、綿向神社の参道、つまり日野祭のメインの通りに位置することから、景観保全という意味も含まれています。空き地や現代風の建物ばかりの中を曳山が行くのと、昔ながらの日本家屋の前を行くのでは、大きく違いますからね。

——なるほど。そのため保存されることになった建物を、ふるさと館として公開することになったのは、どういった経緯で。

——その息子の五代目が、新たに自動車販売業を始めるわけですね。

岡井 五代正吉が、昭和32年（一九五七）に滋賀トヨベット株式会社を設立します。五代正吉さんの同級生だったという方も、もう80歳前後ですがかなりいらつしやうて、「学生時代に、洋館で（酒を）飲んだわ」とか（笑）。

振角 「正吉君は……」と思い出話をなさいますね。

岡井 五代目は、将来的に自動車販売がどんどん伸びていくのを見越した先見の明があったといえます。会社経営としては、やはり日野商人の家族的な従業員のつながりを大事にされていたようです。

振角 酒造会社で使うトラックの車検も、わりに最近まで滋賀県で受けていたといえます。

内閣府補助金で、都市農村交流の拠点として再生

岡井 平成27年に完結した『近江日野の歴史』全9巻を編纂する過程で集まった資料が、古文書を中心に5万点ぐらいあり、その保管・活用場所が必要となっていました。そのような折、地域再生のための内閣府の補助金の募集があったので、この建物を町で取得・改修し、都市農村交流の拠点としても位置づけて、古文書などの文化財の保存・展示、地産地消食体験レストランの開設、景観保全などに活用するという町づくり計画を作成して申請したところ、認可され、整備の運びとなりました。

——この蔵が、古文書の保存場所に活用されているんですね。

振角 町指定文化財になった翌日の4月1日に、近江日野商人ふるさと館としてオープンしました。



「ふるさとランチ」毎月1回新座敷で提供
メニュー：昔ながらの手作り郷土料理
料金：入館料込み 1,000円（先着順）
「ふるさとご膳」10名様以上で要予約
メニュー：日野祭などハレの日の伝統料理
料金：入館料込み 2,000円
予約専用ダイヤル：090-8456-1809



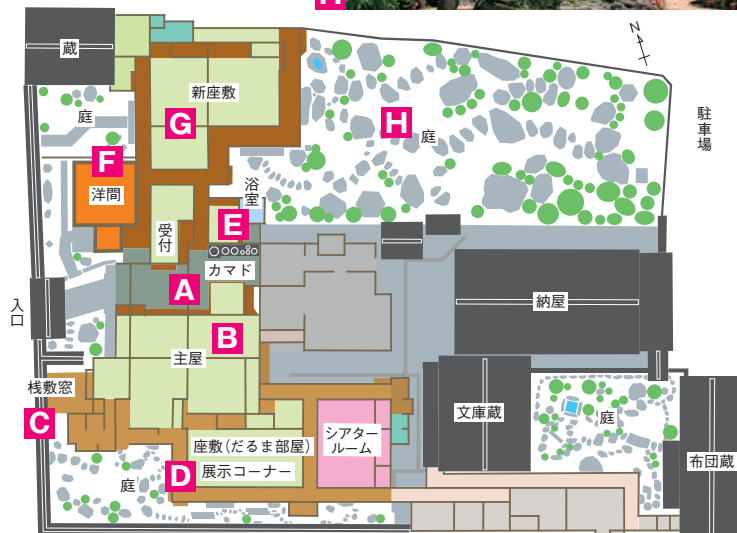
↑↓長押につけられた釘隠しは、吉祥文様である蝙蝠と雲（きのこ）。「湖東の名工」として知られる能登川町の鍔金師、亀文堂（波多野正平）の手による



→「ふるさとランチ」
平成28年11月の膳

写真アルファベット順に（CとHは日野町教育委員会事務局提供）

- A** 入口からすぐの受付の次の部屋にすえられたカマド。一般的な商家では3基だが、常用5基と保温用1基。火伏せのお札は、ふつう近江では京都の愛宕山だが、駿河の浅間大社のお札もある
- B** 箱火鉢の置かれた座敷。神棚の前の吊り灯籠に安政年間の銘がある
- C** 日野祭当日の棧敷窓からの眺め（平成28年5月3日撮影）
- D** 通称「だるま部屋」には、四代目正吉夫人・園子のだるまコレクションが並ぶ。南面は館資料の展示コーナー
- E** シャワーなどが完備された浴室の窓にはステンドグラス
- F** 洋間へは、写真左手奥のドアを使って外から出入りができる。暖炉（煙出しもなく形だけのもの）の上の絵には富士山が描かれている
- G** 庭をのぞむ新座敷の襖絵は、明治～昭和初期に活躍した大津出身の絵師・渡辺公観の作品。いすとテーブルは食体験用のもの
- H** 庭の眺め。上から順に雪景色、3月の紅梅、6月のツツジ。十三重石塔の左に綿向山が見えるが、借景として作庭されたわけではないそう





新座敷で味わう「ふるさとランチ」も人気

——来館者はどんな方々ですか。

岡井 年配のご夫婦が一番多いですね。新座敷を用いて、先ほど述べた計画の中の地産地消食体験レストランの役割として、食体験事業も行っています。

「ふるさとご膳」は、日野産の食材を用いた伝統料理を日野の塗り碗で召し上がっていただくもので、「鯛そうめん」や「鯛ぶた」は、祭りの日のいわゆるハレの食事です。10名様以上からのご予約制で、ご利用客は若い方から年配の方まで幅広いですね。お住まいも近畿・中部にわたります。季節の食材を使った手づくりですので、日野菜も採れる時期にしかお出しできません。月に一度開催している「ふるさとランチ」

は、「ふるさとご膳」に比べて価格も手軽で、お一人様からでもお申し込みをお受けして

います。地元でも作られなくなってきた昔ながらの手作り料理を取り入れた献立で、気軽に利用できる多くの方にご好評をいただいています。

振角 設定された日以外にも、同窓会の集まりや、女性方の集まりでもご利用いただいています。ただし、お酒は出せません。

——入館者はどんな感想をもたれていますか。

振角 圧倒的に女性の方ですが、年齢層に関係なく、ステンドグラスや洋間を見て「あー」と、声を上げられます。

——日本式の家具類でも、金具の取っ手などがかわいいですね。

岡井 そうなんです。建具に使われているモチーフや、細かいディテールまで見ておられますね。吊り灯籠の下のくりぬき穴がハートの形だということに気づかれたり。

特等席になる5月3日の日野祭

——来館者が一番多いのは、やはり5月3日の日野祭の時ですか。

振角 紅梅が見ごろの3月初旬もお勧めです。

岡井 6月のサツキもなかなかいい。

振角 ……ですが、やはり人気は5月の日野祭ですね。棧敷窓に毛氈を敷いてセッティングします。そこに乗ってもらうわけにはいかないのですが、立派なカメラをお持ちの方が前に陣取られます。窓枠がちょうど額縁みたいな役目を果たして、おもしろい構図になるようです。

西大路の曳山は、仁正寺藩9代藩主の市橋長富が寄進したと伝わっています。名古屋の職人の手による造りだとされ、16基ある曳山の中で最大です。武家としての威信をかけたものなのでしょうが、大きすぎるので見えない所に4つ補助輪を入れた8輪

車なんです。

岡井 他の曳山と同じようにジャッキアップして方向を変えるのですが、本当に重く、なかなか動きませんでした。

振角 完成して初めての巡行では、道をはみ出して水路の石積みなどを壊し、時間もかかってしまい、一部の部材をはずして重量を軽減したことが記録に残っています。

この曳山を収納している山倉が、大正時代に現在地に移転したときは、山中正吉家が協力したそうです。

——日野祭は神輿も巨大ですね。

岡井 私自身も、日野祭では神輿をかいています。担ぎ手はプロやセミプロの人も加わって約100人ぐらいが30〜40人ずつ交替しながらなんですが、初めて担いだときは感動して涙が……。本当に楽しいですよ。

↓日野祭当日、ふるさと館前の参道を綿向神社へと向かう曳山
(平成27年5月3日撮影、日野町教育委員会事務局提供)



——事前に練習などをするんですか。

岡井 大窪・松尾の神輿は6年に1回の神輿当番なので、「地渡し」といって、小さい神輿で地元を歩く練習日があります。私は、隣の曳山にも参加させてもらって、囃子もやっているのですが、お囃子は各町内で、口承で先輩が子どもたちに教えて傳承していきます。混じった駄目だとされていて、町ごとに明らかに節回しなどが違います。

振角 純血主義というのか、昔は絶対に他の町に聞かれないようにしていたみたいです。祭当日、私はカメラを持って曳山について回っていますが、職業柄、傷んでいるところばかり気になって（笑）、車輪とか下ばかり見がちです。

岡井 1基を、20軒ほどで維持されているんですよ。

——日野以外にも、維持が経済的に大変だそうですね。本日はお忙しいところ、ありがとうございました。（2016・12・1）

日野祭礼之図 渡辺雪峰

近江日野商人ふるさと館
旧山中正吉邸

岡井健司

渡辺雪峰は、山梨県富士吉田出身の日本画家・書家。明治元年、幕末の志士新徴隊の一員であった父平作の次男として、山形県庄内で生まれました。明治6年（1873）、郷里の富士吉田に父とともに帰郷し、絵を嗜んだ父の影響を受けて幼少期から画業を志しました。画を渡辺小華、書を長三洲に学び、明治35年（1902）に東京へ出て日本文人画協会を主宰し画家としての地位を確立しました。山水画のうち文人画の系譜をひく南画を得意とし、明治・大正・昭和にわたって活躍、昭和24年（1949）、富士吉田の福源寺にて没しました。

本図は、箱裏書により、明治26年晩春に雪峰が湖東日野溪を訪れた折、偶然に綿向神社の祭典を見る機会を得、北浦雅契氏の求めに応じて描かれたものであることがわかります。

雪峰が目にした祭典は、日野町村井に鎮座する馬見岡綿向神社の春の例大祭・日野祭のことで、5月3日の本祭には、綿向神社と御旅所である雲雀野の間を3基の神輿や神子・神調社の行列が渡御し、16基ある曳山が巡行する湖東地方最大の春祭りです。

本図には、多くの見物人で賑わう祭りの日の御旅所の様子が、力強く大らかな筆致で生き活きと描かれています。図中を詳細に観察すると、御旅所に集結した曳山（現在、御旅所へは1基のみが巡行）、奉納が廃止されて久しいホイノボリ（和紙と竹で作った幟・図中央右）や、現在とはデザイン異なる神輿、神調社の衣装が精緻に描き込まれるなど、古式の日野祭の様子をうかがい知ることができ、民俗資料としても価値の高い作品と言えるでしょう。



絵を所望した北浦氏とは、御旅所が位置する日野町上野田に本宅を構え、東京八王子にて酒造業を営んだ日野商人北浦権平氏のこと。江戸時代中期から明治の頃、多くの画人たちが日野商人の財力と文化力を頼って日野を訪れました。日野近郷の蒲生郡桜川村（東近江市）には山梨県甲府で酒造業を営んだ近江商人野口忠蔵家があり、当代当主の夫人は女流南画家として著名な野口小蕨でしたから、雪峰は野口家との縁を頼りに日野の地を訪れたのかもしれない。

日野ひなまつり紀行

2月12日(日)～3月12日(日)

近江日野商人館(旧山中兵右衛門邸)
近江日野商人ふるさと館(旧山中正吉邸)
日野まちかど感応館(旧正野薬店・観光協会事務所)
各家および商店街など



御殿雛

蒲生氏の城下町であり、近江日野商人の故郷でもある日野町。懐かしさを感じる街角や商家、商店街で、江戸時代から現代にいたるお雛様や創作人形による雛飾りが行われます。日野独特の風景でもある棧敷窓が並ぶそんな町なかを、華やかな雛人形と出会いながら散策してください。

入館料: 近江日野商人館〔大人300円、小中生120円〕、近江日野商人ふるさと館〔大人300円、小中生120円 ※商人館・ふるさと館両方入館の場合は2館で400円〕、日野まちかど感応館〔無料〕

休館日: 3館とも期間中は無休

お問い合わせ先: TEL 0748 (52) 6577 (日野観光協会)

企画展 シリーズ 曳山の美
百花繚乱

1月30日(月)～3月12日(日)

長浜市曳山博物館



月宮殿桐幕

月宮殿町田組蔵

かすり
紺と生平

2月6日(月)～26日(日)

愛知川駅コミュニティハウス「るーぶる愛知川」

職人の手仕事により作り出された近江上布の着物と帯、そして図案や、生地見本も展示します。期間中、近江上布伝統産業会館の織り人研修生による実演もあります。

入館料: 無料

休館日: 会期中無休

■地機と手績みの実演

2月12日(日)、19日(日)、23日(木)

午前10時30分～午後3時30分

お問い合わせ先: TEL 0749 (42) 8444

下坂鍛冶と越前康継

—秀吉・家康に信頼された鍛冶たち—

1月29日(日)～2月26日(日)

長浜城歴史博物館

近江国坂田郡下坂村(長浜市)に興った下坂鍛冶は、戦乱の世で刀工として発展し、文禄・慶長の役、関ヶ原合戦などで下坂槍が注目されると、各地に分封された湖北ゆかりの武将たちに召し抱えられ、全国十数か国に分かれました。

今回の企画展では、下坂庄在国時代の作品を中心に展示し、徳川家康に仕えた下坂市左衛門康継の作刀も特別出陣します。

入館料: 高校生以上400円、

小中学生200円

休館日: 会期中無休

■特別講座「下坂鍛冶と越前康継」

2月4日(土) 午後1時30分～

講師: 森岡榮一(長浜城歴史博物館)

会場: セミナー＆カルチャーセンター「臨湖」

参加費: 500円

お問い合わせ先: TEL 0749 (63) 4611



直槍

銘 下坂住兼先

安土桃山時代

本館蔵(下坂家伝来資料)

天折の画家 三橋節子

こがらしの詩

開催中～4月23日(日)

長等創作展示館・三橋節子美術館

木枯らしの吹く頃、裏山にある菩提樹の実北風に吹き上げられて、湖の町の

三橋節子
「こがらしの詩」

上空をプロペラ状に飛ぶ葉状苞で飛翔する。節子が見たであろう、季節の移り変わりを表現している作品を中心に展示します。

入館料: 大人320円、高大生240円、小中生160円

休館日: 月曜日

■関連企画 三橋節子美術館

万葉画家 鈴木靖将氏のギャラリートーク
& ホットひとときミニコンサート

1月21日(土)、2月18日(土) 午後1時30分～

参加費: 無料(要入館料)

三橋節子の元ご主人、鈴木靖将氏に、身近にいたからこそわかる三橋節子の意外な一面や節子の絵画についてお話しいただき、続いて1月は長岡実穂さん(ピアノ)、2月は花野美咲さん(フルート)・澤日奈帆さん(ピアノ)によるミニコンサートを開催いたします。

お問い合わせ先: TEL 077 (523) 5101

近江上布展

きびら
生平展

開催中～2月5日(日)

愛荘町立愛知川びんてまりの館

国の伝統的工芸品に指定されている近江上布の生平は、大麻の手績糸を地機で織ります。近江上布伝統産業会館の伝統工芸士による作品、そして織り人研修生の成果作品を展示します。



入館料: 無料

休館日: 月・火曜日、1月25日(木)

■地機と手績みの実演

1月21日(土)・22日(日)

午前10時30分～午後3時30分

お問い合わせ先: TEL 0749 (42) 4114

募 集

第20回 日本自費出版 文化賞

募集期間

2016年11月1日～
2017年3月31日

応募資格

制作費用の全額または一部を著者（個人・団体）が負担し、日本国内で2006年以降に出版され、主として日本語で書かれた一般書で、製本された著書が対象。

募集部門

- ①地域文化部門
- ②個人誌部門
- ③小説部門
- ④エッセー部門
- ⑤詩歌部門
- ⑥研究・評論部門
- ⑦グラフィック部門

応募方法

応募用紙に必要事項を明記のうえ、応募著書を1冊添えて文化賞事務局（下記）までお送りください。

応募手数料：2000円

お申し込み・お問い合わせ先

〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町7-16
ニッケイビル7F (株)日本グラフィックサービス工業内
NPO法人日本自費出版ネットワーク
日本自費出版文化賞事務局
TEL 03 (5623) 5411

発 表

2017年9月上旬

賞金／賞品

大賞：賞状／賞金20万円
部門賞：賞状／賞金5万円
特別賞：賞状／記念品
入選：賞状

主催：長浜城歴史博物館友の会 共催：長浜城歴史博物館

対談「近江の城郭を語る」

滋賀県立大学教授 中井均 × 太田浩司 長浜城歴史博物館館長

1月29日(日)

午後1時～ 「長浜城H-1 グランプリ2016」

表彰式・優秀作品発表会

午後2時～ 対談「近江の城郭を語る」

長浜市内の小・中学生から募集した「わたしたちのふるさと長浜のまつり」をテーマとした自由研究の優秀作品5点の表彰式・発表ののち、城郭研究のスペシャリストである両氏が対談形式で武将ゆかりの近江の城郭や史跡について語ります。

会 場 セミナー＆カルチャーセンター「臨湖」
長浜市港町4-9 TEL0749 (65) 2120

受 講 料 500円（事前申込不要）

お問い合わせ先 TEL 0749 (63) 4611（長浜城歴史博物館）

第29回 大近江展

滋賀県内の食品・工芸のお店が自慢の商品をもって上京する年に一度の物産展。近江の祭りや伝統の味、伝統の技をお届けします。

会場 日本橋高島屋8階催会場

東京都中央区日本橋2-4-1

開催期間 3月8日(水)～3月13日(月)

営業時間：午前10時30分～午後7時30分

主催：(公社)びわこビジターズビューロー 後援：滋賀県

■サンライズ出版も新刊書など多数出展します。



第41回（平成28年度） 滋賀県文化功労賞受賞のご報告

多年（おおむね20年）にわたり文化活動の育成、普及等を通じて県民文化の振興に特に顕著な功績のあった個人または団体を対象とする滋賀県文化功労賞を、サンライズ出版株式会社代表取締役の岩根順子が受賞しました。

今回の受賞は、これまで弊社が制作・発行してきた図書の著者の皆様、読者の皆様のおかげです。改めて厚く御礼申し上げます。



昨年10月31日に滋賀県公館で開催された贈呈式にて

長浜曳山祭の幕類や舞台障子には、数多くの花々が描かれています。今回の展示では、ふだん見ることのできない装飾品の数々をご紹介します。前ページの写真は、老朽化にともない、本来の色を再現して復元新調された田町組 月宮殿の桐幕です。原品は17世紀後半ごろのペルシャ絨毯を4枚に裁断し、曳山の桐幕と張出幕に使用されていました。

入館料：大人600円、小中学生300円

休館日：会期中無休

お問い合わせ先：TEL 0749 (65) 3300

大湖南展

—栗太・野洲郡の風土と遺宝—

2月25日(土)～4月9日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

重文・県指定文化財を多数含む、湖南地域の仏像・神像たちが一堂に大集合する企画展です。宗教美術の優品が濃密に分布するにもかかわらず、意外と知られていない湖南地域の魅力を再発見する企画としてご期待ください。

入館料：大人500円、高大生300円

休館日：月曜日（祝日の場合は翌火曜日）

■博物館講座

2月26日(日) 午後1時30分～

「湖南の仏教絵画」

講師：渡邊勇祐（滋賀県立琵琶湖文化館）

3月5日(日) 午後1時30分～

「御上神社の歴史と文化」

講師：行俊勉氏（野洲市歴史民俗博物館）

3月19日(日) 午後1時30分～

「神仏習合の文化史」

講師：大槻暢子（滋賀県立安土城考古博物館）

3月26日(日) 午後1時30分～

「狛坂磨崖仏をめぐる」

講師：松村浩氏（栗東歴史民俗博物館）

4月2日(日) 午後1時30分～

「神道美術の最稠密地域・近江湖南における神像彫刻と狛犬を語る」

講師：山下立（滋賀県立安土城考古博物館）

会場：安土城考古博物館セミナールーム

定員：140名（当日先着順） 資料代：200円

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

近江学 第9号

成安造形大学附属近江学研究所 編
AB判並製本 総96頁 1800円＋税

特集は「道はつなぐ」。美濃と京、東国と西国、朝鮮と日本、それぞれを結んだ“道の国”近江をめぐる論考、庭石の産地として名をはせた大津市八屋戸で用いられた「石出し車」に関するインタビューなどを収録。



竹生島 琵琶湖に浮かぶ神の島

竹生島奉賛会 編
B5判並製本 総80頁 1500円＋税

琵琶湖に浮かぶ竹生島は古来、人々の信仰を集めてきた。日本三大弁才天の一つが本尊である宝厳寺や、本殿が国宝の都久夫須麻神社など、島の歴史や文化財、自然の魅力をオールカラーで紹介するガイドブック。



日暮らしの硯

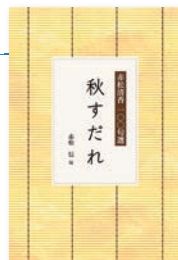
柴原公夫 著
四六判上製本 総274頁 非売品
問合先 大津市芝原一丁目8-23 (著者)

中学校の国語科で、語彙・作文指導などに積極的に取り組んできた著者が、発表要旨や研修報告、教頭・校長時代も含めた学校現場の出来事、退職後の雑感などを一冊に。(2016.11.23刊)



赤松清香100句選 秋すだれ

赤松 信 編
四六判上製本 総108頁 非売品
問合先 TEL0749(22)0627 (サンライズ出版)
2014年、100歳になる直前に亡くなった著者(赤松清香)の遺稿句集。半世紀にわたる作句の中から息子の信氏が100句を選び、思い起こされるエピソードなどとともに解説。(2016.12.20刊)



井伊家十四代と直虎

彦根商工会議所 編
四六判上製本 総360頁 1800円＋税

大河ドラマ「おんな城主 直虎」の時代考証を務める小和田哲男氏や、大石学氏ら一流の執筆陣が、井伊直虎から直政、そして直弼まで、井伊家の歴史を紹介する。口絵と見返しにカラー図版、巻末に年表と系図を掲載。



雪辱 真説・井伊直弼

野村素一 著
四六判並製本 総256頁 1700円＋税

井伊直弼は本当に暴虐な政治家だったのか。史料を丹念にたどることで井伊直弼の人生を浮き彫りにし、今まで知られていなかった史料から、彦根藩士・小西貞義が仇敵・徳川斉昭を討つまでを活写した幕末小説。



びわ湖の森の生き物6 泳ぐイノシシの時代

高橋春成 著
四六判並製本 総170頁 1800円＋税

近年、琵琶湖もふくめ瀬戸内海や九州・沖縄の海を泳いで島へと渡る姿が多数目撃されるようになった。現地を調査し、知られざる現状を報告。



中山道道中案内 関ヶ原から三条大橋

江竜喜之 編
A5判並製本 総128頁 2000円＋税

中山道69宿のうち、近江国の宿場を中心に、関ヶ原(岐阜県)から三条大橋(京都)まで13宿を紹介したガイドブック。詳細マップとともに訪れたい名所旧跡とその地の歴史を解説。



表紙写真 近江日野商人ふるさと館 旧山中正吉邸の新座敷(左)と洋間(右)

編集後記 長い長い板塀に囲まれた空間に入ると、NHKの朝ドラのヒロインが出てきそうというか、昭和初期を舞台にした2時間ドラマ1本ならこの邸内だけでほぼ撮影ができてしまいそうな、近江日野商人ふるさと館。表紙写真の左側、新座敷からの庭の眺めを撮影した後、カメラマンといっしょにガラス障子を開けて、木枠についているネジ式のカギをキュキュキュと回している、かなり久しぶりの手の動きと伝わる柔らかな感触に少し驚きました。⊕

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先